

平成一三年(二〇〇二)一二月の「子ども読書活動の推進に関する法律」の制定を受け政府はその推進計画を策定し、各都道府県にも同様の計画策定を求めた。多くの都道府県がこれに応じ、また市町村でもこれらにならって同様の計画を策定したり策定中と言われる。しかし教育の現場では教員たちが従来からある仕事の上にさらに子どもたちの読書推進という新たな課題をも背負わされた形となり、苦悩している姿も浮かび上がってくる。

最近ある大学で開かれたこの活動に関する研修交流会での発言を見ても、小中学校、幼稚園・保育園、公立図書館・公民館などにおいて子ども読書活動推進に関心を寄せる人々が今こそ手をつなぎ、助け合い、知恵を出し合って積極的に推進していくことが求められていると感じる。こうした会合ではあまり指摘されることのない視点なども含めながらまとめてみた。

#### ●心の保健室―学校図書館

今、全国で不登校の児童や生徒のことが問題になっている。彼らは学校に行きたいと思っても朝になるとお腹が痛くなったり気分が悪くなったりして学校の門をくぐる事ができない。頑張つて登校しても、授業の途中でお腹が痛くなったり気分が悪くなったりして、保健室の世話になる子どもが少なくないと言ふ。

ところが教室では気分が悪かったりお腹が痛かったりした子どもが保健室に入ると、なぜか心が安らぎ元氣を取り戻すとも言われている。教室に存在する、こうした子どもたちを寄せつけない空氣の解明ももちろん緊急の課題だが、同時に学校内には教室や保健室以外にもいろいろな場所があることを思い起こし、それらの活用を図ることが今こそ求められていると感じる。

特に図書室は最も注目されてよい場所のひとつだろう。図書室には子どもたちが横になって休めるようなベッドはない。しかし人類的知恵の集積とも言えるたっさんの本がある。椅子もテーブルもある。絵本や図鑑を取り出して心の休息を得ることも、物語の世界に浸ることも、伝記を開いて様々な人物の少

年時代を追体験することも自在にできる場所である。図書室が子どもたちの「心の保健室」になるような工夫を是非して欲しいものだ。

このとき忘れてならないのは教員や職員も存在である。訪れた子どもを監視するのでも問いたすのでもなく、そつと見守り、時に本選びの手助けなどをしてくれる大人のこともだ。保健室に養護教諭がいるように図書室にも司書教諭の常駐が理想である。が、それが無理な場合、簡単に諦めるのではなく精一杯の知恵をめぐらしてそれに代わる方法を模索して欲しい。学校図書館法の改正から十年、国の施策によって「学校図書館に専任者が配置される」という夢は叶えられただろうか。司書教諭の発令を「図書室に常駐する職員の

## いま 子どもたちのために して欲しいこと

ある子ども読書研修会の報告から

北原 園彦

配置」と混同しただけではなかつたらうか。従来の規則や慣例ばかりを重んじ、国の施策を待つだけでは何も変わらないことを知る必要がある。

この点、岡山市などに見られる「学校司書」の配置は地方がめぐらした知恵の好例と言えるだろう。真に子どもたちの健やかな成長を願う自治体にとって、専任者の配置はその裁量や施策で十分に実行が可能なものである。鹿児島県内での実績もそれを証明している。

仕事の目的を子どもたちの管理と勘違いしないこと、何より本が大好きなこと、またそれ以上に子どもが好きなこと、これが「学校司書」に要求される適性である。

#### ●授業の資料を提供―市町村立図書館

司書教諭が配置され活発に活動を始めること学校全体から図書室の有用性が認知され、多くの教員から授業に使う資料の提供を求められると報告された。司書教諭といつても学校図書館の仕事だけが日常の業務ではない。他の教員と同様、毎日授業を受け持ち、学級指導や生活指導なども行っている。しかも授業で使う資料の要求はほとんどが前日に出されると言う。一人でこれらの要求に応えようとしたらたちまちパンクしてしまうだろう。

総合的な学習の必要性が叫ばれるようになって、教科書以外の資料にあたりたり、校外に出て聞き取り調査などをする機会が増え、特に郷土資料に対する需要が高まったと言ふ。学校図書館でこれらの資料を提供するために日頃から収集にも留意していなければならぬ。司書教諭の負担は増えるばかりだ。責任感の強い人だったら心理的な圧迫だけでも相当なものになるだろう。しかも要求に応えれば応えるほど学校内での期待はふくらみ、要求が増え、その内容は高度なものになってゆく。こうした状況は「学校司書」を配置した場合でも同様である。熱心に仕事に励めば励むほど子どもたちは図書室を訪れ、教員たちは図書室を頼るようになる。

そこでお勧めしたいのが地元の公立図書館の利用である。と言うよりも公立図書館、特に市町村立図書館にはこうした学校図書館の状況を常に察知し、協力援助の手を差し伸べるようお願いしたい。日頃から郷土資料の収集に熱心で、そうした資料の内容を一番良く知っているのが公立図書館員だからだ。今こそ一般市民だけでなく学校教育の現場にも目を向け、教員や子どもたちの資料要求を掘り起こし、それらの要求に積極的に応えて欲しいと感じる。日頃から多くの資料に接し、その積み重ねを持つ人々でなければできない仕事である。まさに資料専門家としての本領が発揮される絶好の機会がそこにはあり、出番を待っているのだ。

だから司書教諭の側も「学校司書」の場合も、孤軍奮闘するだけでなく、こうした機関や施設そして専門家の活用も仕事の重要な一部であることを思い起こして欲しい。

### ●心を届ける―ボランティア活動

今どこに行っても「読み聞かせ」という言葉を耳にする。本が大好きな教員が子どもたちに読書の楽しさを伝えようと教室や図書室で民話や昔話などの児童読み物を読んであげたのが活動の始まりと思われる。それが子どもたちの読書離れが叫ばれ始めた十年ほど前から広く全国の関係者に知られるようになり、その意義が強調され、小学校だけでなく幼稚園や保育園においてもいろいろな実践が試みられるようになった。

中でも注目されるのがボランティアの人々による精力的な活動である。PTAの活動として特定の学校に限って行われるものもあれば、学校や幼稚園や保育園を限定せずに要望があればどこへでも出かけて行って活動する熱心な団体もある。また公立図書館や公民館などの「お話し会」のプログラムとして行われているものもある。

これらの活動に参加する人々は特にベテランになればなるほど、どんなお話しが子どもたちに飲ばれるか、受けるかをよく知っている。途中で子どもたちがだれてしまうことの惨めさも経験していて、これを避けるには朗読術の工夫と練習しかないと思う多くの人が考えている。熱心に勉強会を開いたり、朗読教室に通ったりと日々研さんに余念がない。こうしたベテランに、受けを狙うあまり作品選びが疎かになっていないかと、だれることを恐れて短い作品や語数の少ない作品ばかり選んでいないかなどと講演するのは釈迦に説法というものだろう。

しかし、そんなベテランにも一九八八年に亡くなった大俳優・宇野重吉さんの言葉は参考になりそうな気がする。宇野さんは劇団民藝の代表だったが、舞台だけでなく映画やテレビドラマにもよく出演された。あるとき舞台での演技と他の演技を比較して次のような意味のことを言われたのである。カメラの前では監督の指示通りに常にそう見えるように演技をするが、舞台では客席に演技が届くように必死で台詞を投げるんだよ、と。観客と向き合うライブ活動には、舞台上立つ演者の技巧だけではどうにもならない部分があることを教えてくれる言葉だろう。

絵本にしる読み物にしる読み手が朗読に

工夫を凝らせば凝らすほど、そこから聞こえてくるものはCDなどの機械的な響きに近づいてしまうというジレンマに陥る。そのときの朗読がCDなどの朗読者と同じマイクに聞かせるためだけの朗読になっていないかどうか、目の前にいる子どもたちに自分の心を届けようと必死になっているかどうか、各自今一度問いかけて欲しい。

### ●絵本の言葉に注目―幼稚園・保育園

幼稚園教諭 保育士、ボランティア、父母に「皆さんはどんな基準・視点で絵本を選んでいますか」と尋ねると、多くの人が「絵や画家で選びます」「ストーリー（お話し）で選びます」「作家で選んでいます」と答える。そこで気になるのが言葉の問題である。絵が好きだからと選んでも、ストーリーが面白いからと選んでも、好きな作家の作品だからと選んでも、読むとき必ず目にするのは、そして子どもたちが耳にするのは絵本の中の言葉である。それなのに、なぜ言葉で選ぶという人がいないのだろうか。

そういう目で見えていくと、いくつも気になることが出てくる。例えば歩き始めたばかりの赤ちゃんに読んであげる絵本の言葉は赤ちゃんの想像力を養い、心の芽を育てる上でとりわけ大切なものだ。絵の有無に関わらず、心に響く言葉があり、表現がなければならぬ。が果たして、そういう視点で創られている絵本がどれだけあるだろうか。単にかわいい絵や好きになってもええそうな絵を並べているだけではないだろうか。絵本に名を借りたキャラクター商法と、言葉に心血を注ぐ絵本づくりは厳格に区別されなければならぬ。

幼稚園や保育園や図書館や小学校などで子どもたちに読んであげている絵本はどうだろうか。本当に子どもの読書を願う視点で選ばれたものだろうか。子どもたちの読書の力をどう伸ばしてゆくか十分な検討が行われ、そこで選ばれた絵本が計画的に読まれていると胸を張って主張できるだろうか。

読書は言葉と向き合う心の作業である。読み手は文字の言葉と向き合い、聞き手である子どもたちは音の言葉と向き合っている。絵本の絵は確かに子どもたちの想像力を助けて

くれる。しかし助けられながらも、子どもたちが登ってゆくのは言葉の山である。初めは音の言葉に手を引かれて歩み始める。そして次第に脚力をつけ登山口を探し、やがて自力で文字の言葉の山へと分け入って行く。是非このことを胸に刻みつけ、絵本を手にしたときその言葉にも注目して欲しい。

### ●本選びは必ず実物を手にとって

図書館の世界にも本選びにもパソコンが使った。本探しにも本選びにもパソコンを使うことが多くなった。毎日たくさんの絵本や児童書が出版されている。よほどの大人数でないと言分けてもそれらの全てに目を通すことは難しい。相当注意していても見落としが出そうである。

絵本を選ぶとき言葉にも注目して欲しいと言ったが、どのような視点で選ぶにせよカテゴリーやパソコンで選ぶやり方には賛成できない。実物に手を触れることなく、販売会社のコメントや著者や出版者の名前だけで選ぶのは論外である。マスコミの書評風の記事にも著名人のコメントや思い出話の中にも広告の類が混じり込んでいるかもしれない。

どんな本を選び受け入れるかは図書館活動の基本に関わる一大事だ。自分の目を信じ、自分の舌で絵本の言葉を音に変え、その音を自分の耳でよく聴いて、確信を持ってひとつひとつ選んでゆく努力が図書館員を育てる。その努力を惜しんではならない。子どもたちに読んであげる場合の本選びについても全く同じことが言える。選ぶ過程をもっと大事にしたい。

幸い県立図書館の中には相当網羅的に絵本や児童書を受け入れているところが少なくない。そうした県の人々は実物を手にとって自分の目でじっくり本を選べる機会に恵まれている。子どもの読書を願う人々がこうした図書館へ計画的に通い、恵まれた機会を活用し、それぞれの確かな視点で絵本や児童書と向き合うよう希望する。(絵本プロデューサー)